

## 6. IoT時代に活躍する人材

### 6.1 IoT時代を切り拓く人材

IoTを支える基盤として、IoTを高度に活用する技術を生み出したり、IoTを前提とした新たな製品やサービスを生み出す「人材」の観点もきわめて重要である。「IoT」という概念は、全体を総称した非常に幅広い概念であり、今後の社会において、IoTがどのように活用され、どのような付加価値をもたらすのかという点については、未知の部分も多い。しかし、未知であるということは、未だ多くの可能性を秘めており、技術やサービスの今後の具体化と発展の余地が多く残されているということでもある。

こうした状況の中で、未知の領域を切り拓く際に中核となるのが「人材」である。今後、IoTの最先端で活躍する人材がIoTをどのように捉え、その世界の中で何を実現しようとしているのかという点に着目することは、IoTがもたらす未来社会像を予測する上での非常に重要なポイントとなり得る。また、IoT時代に活躍できる人材に求められる能力を明らかにすることは、今後そのような人材の育成に取り組む上でも重要である。

こうした観点に基づき、本節の締めくくりとして、以下には、現在IoTに関連する分野の最先端で活躍する人材に対するインタビュー結果を取りまとめるとともに、IoT時代に活躍できる人材の求められる能力を整理した。

### 6.2 IoT時代を切り拓く有識者へのインタビュー

今回は、IoTに関連する分野の第一線で活躍する有識者として、以下の方々に対するインタビューを実施した。

表 6-1 IoT時代に活躍する人材に関するインタビュー対象者<sup>137</sup>

対象者	所属	分野
野辺継男氏	インテル株式会社 オートモーティブ・ソリューション・グループ チーフ・アドバンストサービス・アーキテクト (兼) ディレクター	自動運転 IT × クルマ
岡野原大輔氏	株式会社 Preferred Infrastructure 取締役副社長	人工知能 × IoT
稲田雅彦氏	株式会社カブク 代表取締役	3D プリンタ IT × ものづくり

以下には、上の有識者に対するインタビュー結果を示す<sup>138</sup>。

<sup>137</sup> 所属・肩書きは、2015年3月時点のもの。

<sup>138</sup> 各インタビューのタイトル部分の右上のイラストの出所は次のとおり。

(出所) Freepik, freepik.com ([http://jp.freepik.com/free-photos-vectors/ソーシャルメディア現代人ベクトル\\_720280.htm](http://jp.freepik.com/free-photos-vectors/ソーシャルメディア現代人ベクトル_720280.htm))

# 未来社会が私たちに問うもの



## インテル株式会社

オートモーティブ・ソリューション・グループ  
チーフ・アドバンストサービス・アーキテクト (兼) ディレクター  
のべつぐお  
**野辺継男氏**

1983年、日本電気(株)入社。国内外でPC関連事業を始めとする新規事業開発を担当。2000年に同社を退職後、MMORPG系オンラインゲーム会社を始めとする複数のベンチャー企業を立ち上げ、CEOとして活躍。2004年、日産自動車(株)入社。プログラムディレクター兼チーフサービスアーキテクトとして、同社のテレマティクスサービスやEV・ITを導入。2012年、インテル株式会社に入社し、自動運転の実現に従事。2014年から名古屋大学准教授兼任。現在もクルマ×ITの第一線で活躍中。

## 10年で激変するITの世界

ITの世界は10年を節目として大きく変化していきます。2000年頃、パソコンをネットワークにつなぐことは、まだそれほど一般的ではありませんでした。しかし、2000年前後にADSLや4G携帯が登場したことで、インターネットへの接続は一般化し、状況は激変します。2000年代後半にはスマートフォンが登場し、インターネットに接続する機器数は、爆発的な増加を始めます。2010年にはiPadが登場し、PCのみならず多様な機器のインターネット接続に一層拍車をかけました。「IoT (Internet of Things =モノのインターネット)」とは、このようにすべてのものがネットワークにつながる流れの拡大を予見して、2010年代の初めに急激に浸透した言葉です。このIoTをキーワードとして、2010年から2020年に向けて、きわめて大きな変化が起きています。

## クルマ × ITという新しい可能性

IoTの世界でインターネットにつながる“モノ”とは、パソコンやスマートフォン、タブレット端末だけではなくありません。この“モノ”にはあらゆるものが含まれる可能性があります。現在は「クルマ」も

その一つとして有望視されています。私自身は、2000年頃、つまりインターネットが世の中で広く使われ始めた頃から、クルマをインターネットでつなぐということに強い関心を持っていました。そこから10年以上が経過して、ようやく世の中でも、この可能性が現実のものとして議論されるようになっていきます。クルマがインターネットにつながれば、実にいろいろなことが実現できるようになると思いますが、特に今、高い注目を集めているのが、人が運転しなくても走行できる「自動運転」です。今後、自動車産業を始めとする製造業は、ものづくりだけでは勝てなくなる可能性が高いといわれています。製造業においてもモノとサービスをどのように融合するかが、今後の付加価値を高め、競争力の鍵を握



るはずで、実用に向けた技術的な課題はまだ多いものの、インターネットを利用した自動運転技術などの新しいサービスは、自動車産業に限らず今後の製造業の競争力の源になると思います。

## 自動運転に関する課題

クルマの自動運転を行うためには、道路の情報や周囲の障害物に関する情報が必要です。これらの情報は、クルマに搭載されたセンサやカメラなどの機器を通じて収集するほか、ネットワークを通じて車外から提供される情報も活用します。このような周囲の情報を活用して、人間による運転と同等またはそれ以上に安全な運転が実現できるかどうか、自動運転に関する課題と言われていますが、私はこれ



らの技術的な課題は、今後も指数関数的に進展するITによって直に解決されるものと考えています。先端的な技術を活用する際の課題は、「人間がその技術を活用できるか」という点にあります。技術に関する大きな課題は、最終的には「人間」の側にあるのです。自動運転についても、最終的には「人が運転するより安全と思えるか」という「人間の側の意識」が、乗り越えるべき大きな課題になるのではないかと考えています。

## 技術の先にある「人間」の課題

今後は、クルマに限らず、あらゆるモノがネットワークにつながることが予想されています。例えば、現在、地球上で数十億台のモバイル端末が利用され

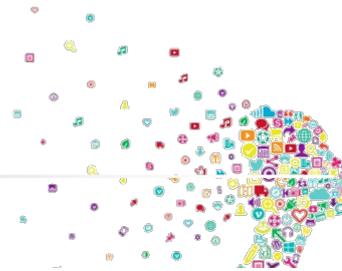
ていると言われていますが、この数が百億台を超えるのは、もはや時間の問題です。百億台規模のモバイル端末がインターネットにつながり、各端末の情報をサーバーに集めて処理できる環境が実現されれば、もはやそれは地球規模での人工知能に等しいと言えるでしょう。実際に、2045年には、人間の知能を超えるコンピュータが10万円程度で入手できるようになると予想されています。今のパソコンと同じような価格でもっと高度な知能が手に入るのです。そう考えると、2020年より先の、しかし、そう遠くない未来に、人間の仕事の多くが自動化された社会が実現される可能性も十分に考えられます。

人間の仕事が自動化された社会では「人間がやるべきこととは何か」が真剣に議論されるようになるでしょう。運転のような認識・判断を伴う作業や計算・分析作業は、人間よりもコンピュータに任せたいほうが早く確実であると思います。人間の仕事を代替できる、人間よりも優れた技術に囲まれたとき、人間がすべきことは何なのか。未来社会を生きる人間は、この問いに答えることが求められるでしょう。

コンピュータは、与えられた情報から論理的に正しい結論を出すことを得意としています。しかし、与えられた情報から「これまでとは異なるまったく新しいものを考えること」は、おそらく人間にしかできないことであろうと思います。そのため、あらゆるものが便利になった未来社会では、誰も発想しなかった新しいことを考えたり、それによって人を楽しませることや喜ばせることが重要になり、そのような能力を持った人材が活躍するようになるのではないのでしょうか。人間が持つ無限の発想力や創造性は、人間にしかない最大の武器です。これが、IoT時代、そしてその先の未来社会を生きる人間にとって、最も重要な能力ではないかと私は考えています。



# 人間という複雑さへの挑戦



## 株式会社 Preferred Infrastructure

取締役副社長

おかの はらだいすけ  
**岡野原大輔氏**

2010年、東京大学情報理工学系研究科コンピュータ科学専攻博士課程修了、情報理工学博士。2006年に(株) Preferred Infrastructure を3名で創業。Google レベルの学生が起業したベンチャー企業として注目を集める。エンタープライズ向け全文検索エンジン『Sedue (セデュエ)』の開発を核に、自然言語処理/大規模データ処理系のミドルウェアを開発。2005年度 IPA 未踏ソフト創造事業「スーパークリエータ」認定。

### IoTが現実世界にもたらすもの

これまで、コンピュータの世界では、限られた資源を効率良く利用する「最適化」が進んできました。今後、IoT (Internet of Things) の進展によって、様々なモノがコンピュータを搭載してネットワークにつながると、「最適化」がリアルな現実世界においても進むようになると思います。現実世界には、もっと効率良く物事を進めることができる非効率な部分がたくさんありますが、IoT の進展によってリアルなモノがコンピュータの世界に組み込まれることで、モノの最適化が進み、現実世界の非効率な部分がさらに解消されるようになると思っています。

例えば、トランスポートーション (モノの運搬や人の移動手段) は、IoT の進展によって確実に最適化が進む分野だと考えています。小型の無人航空機 (ドローン) による配達のほか、車の自動運転もその代表例といえるでしょう。運搬・移動の手段が変わると、世の中は大きく変わり、さらに便利で効率的な社会が実現するはずです。

その他には、製造業でも大きな変化が起こると考えています。モノのコンピュータ化によって、これまで以上に生産工程の無人化が進み、生産効率もさらに向上するでしょう。将来的には、工場自体の仮

想化やマルチテナント化も進み、無人の工場において、多様なリソースを最適な形で利用できるような新しい生産形態が生まれることも予想されます。

他にも IoT の進展によって大きな発展を遂げる可能性がある分野として、バイオヘルスケアが注目されています。近年、ヒトゲノムの解析が血液検査と同じような手軽さで行えるようになりつつありますが、バイオヘルスケアの分野では、これらのゲノム情報を診療に活用できる可能性があります。例えば、個人の生活習慣に関する情報やその他の医療情報とともに、個人のゲノム情報を活用して最適な診断を行うこともいずれ可能になると思います。こうした新たな情報の活用が可能になれば、医療の分野にも革新的な変化が起こるでしょう。



## 無人化により仕事はなくなるのか

IoT の進展によって、私たちの生活が便利になる反面、無人化が進むと、これまでにあった仕事が無くなるのではないかという声が聞かれることがあります。しかし、これまでに IT が普及し、様々な作業が効率化されても、企業の仕事は減らないように、新しい技術の登場によって社会が変わっても、新しいニーズや市場が生まれ、そこに新たな仕事が発生するのではないかと思います。コンピュータに置き換えられる仕事もあるとは思いますが、その周辺で新たに必要となる仕事も多いのではないのでしょうか。

## コンピュータは人間を超えるのか

IoT というキーワードとともに近年再び大きな注目を集めているのが人工知能です。人工知能は、昔から研究が続いている分野ですが、世間の期待値が高いこともあり、期待されたほどの成果を挙げられない時代が続いていました。しかし、最近になって、革新的な変化が起こり始め、人工知能に対する世間の期待が再び高まっています。



こうした期待の中で、コンピュータが自律的にその機能を拡大し、いつか人間を超えるのではないかという議論も活発に行われるようになりました。早くも 2045 年には人間を超えるという説もありますが、私は現在の延長線上では、まだコンピュータが

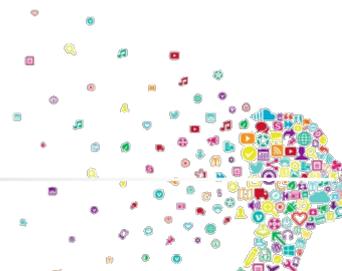


人間を超えることは無いだろうと考えています。確かに最近の人工知能は、人間に近い水準の画像・音声の認識能力を備えるまでに進化しています。しかし、人工知能が自律的に成長するためには、自分自身を超えられるような学習機能を備える必要がありますが、そのような機能を実際に実現するためには、もっと人間の知能について理解することが必須となります。現在はまだ人間の知能について不明な点が多すぎるのです。例えば、人間はときに過去のご概念や活動の枠を超える画期的なものを発想することがありますが、このような「インプットの範囲を超えるアウトプット」をコンピュータが自ら生み出すことは、現在の研究成果に基づく限り、まだ難しいと考えられます。将来の人工知能がどうなるかは未知数ですが、自律的に成長する仕組みを持った人工知能を生み出すためには、人間が学習する仕組みそのものを、もっと深く理解することが必要なのです。

## 人工知能の挑戦

近年、人間が行う認識や理解のプロセスの複雑さが改めて明らかになってきました。コンピュータは、人間が意識的に頭を回転させる計算処理などをたやすく行うことができますが、人間が無意識のうちに自然に行っている言語処理などをたやすく行うことはまだできません。人間が無意識に行う作業のほうが、実はコンピュータにとっては高度で難しいのです。人間と同じような認識や理解、そして、学習と成長が可能な人工知能を実現するためには、まず人間が持つ高度で複雑な知能の働きを十分に解明する必要があります。このような意味では、人工知能の今後の発展は、人間という生き物の複雑さを解明するための挑戦とも言えるのかもしれない。

# 未来を考えるとということ



## 株式会社カブク

代表取締役

いなだまさひこ  
**稲田雅彦氏**

東京大学大学院（コンピュータ科学専攻）在学時に人工知能の研究を行うとともに、人工知能や3Dインタフェースを用いた作品を発表。2009年、同専攻を修了し、(株)博報堂に入社。多様な業種の新規事業開発や統合クリエイティブ戦略を手がける。カンヌ、アドフェスト、ロンドン広告祭、TIAAなど、受賞歴多数。2013年、(株)カブクを設立。(株)電通とも連携し、3Dプリンタを用いた新時代のものづくりプラットフォーム「rinkak」を提供。ものづくりのまち・東大阪出身。

## ものづくりに起きる「革命」

ソフトウェアの世界では、10年以上前から、アイデアを独占せず、公開してよりよいものにするというオープンソースの考え方が浸透してきました。公開によって多くの人々の力を得ることが可能になるため、優れたアイデアを独占したままとするよりも、結果的にはずっと早く、そして安く、よりよいものが生み出されるようになりました。ソフトウェアの世界は、このようなオープン志向によって大きく発展したと言えるでしょう。最近では、IoT（Internet of Things）の進展や3Dプリンタなどの新しい製品の登場によって、この考え方が、ハードウェア、すなわちモノの世界にも広がっています。

今、私が手がけているものづくりマーケットプレイス「rinkak（リンクカク）」は、これまで生産設備を持つ企業に閉じてきたものづくりを、もっとオープンにするための取り組みです。「rinkak」は、モノやデザインを考えるクリエイターとそれを生産する製造者、そしてそれを購入する買い手を結びつけるプラットフォームとして機能します。「rinkak」には、アクセサリや食器、雑貨などを始めとするクリエイターがデザインした多彩な品物の3Dデータが掲載されており、買い手はこれらの3Dデータを見て品物を

注文します。品物は注文を受けてから3Dプリンタを保有する製造者によって製造され、買い手に発送されます。これは、生産設備や在庫を持たずに手軽にもものづくりに参加できる新しい仕組みです。このような仕組みによって、ものづくりへの参加がもっとオープンなものになれば、ソフトウェアと同じように、ものづくりの世界も大きく変わっていくはずです。ものづくりは一部の企業に閉じたものではなく、もっと多くの企業や個人が容易に参加できるものになるでしょう。

3Dプリンタを活用したものづくりは、今や自動車





の車体から航空機の部品にまで及んでいます。また、細胞を素材として人工臓器を製造するバイオ 3D プリンタも登場したほか、中国では、大型の 3D プリンタを使って家やアパートを建てた事例も報道されています。今後、こうした広範な領域でもものづくりの参加者が広がっていくとしたら、これは「ものづくりの民主化」と呼ぶに相応しい革命的な変化です。この「ものづくりの民主化」によって、未来の産業の姿は大きく変わる可能性があると言えるでしょう。

## 不透明な時代に求められるもの

IoT が当然の基盤となるこれからの時代は、様々な可能性に満ちています。ソフトウェアとハードウェアの融合によって、これまでにない新しい製品やサービスが今後数多く生み出されるでしょう。しかし、新しいものが生まれる可能性に満ちているということは、何が生まれるか予想できないということでもあります。これはすなわち、これから先の時代が非常に不透明だということを意味しているのです。

不透明な時代には、一つの領域を極めたスペシャリストではなく、何でも幅広く対応できる「フルスタック型」の人材が重宝されます。何が求められるか分からない時代だからこそ、何でも柔軟に対応できることが重要です。特に IoT 時代には、ソフトもハードも理解できることが重要になるほか、それをビジネスに生かすために、マネジメントやファイナンス、マーケティングなどの知識も必要となります。

私自身も、サイエンス、エンジニアリング、アート、デザイン、ビジネスと、幅広い分野を経験して

きました。ややもすれば、「Master of NONE」ともとれますが、不透明な時代においては、一つの分野だけを追求するより、幅広い分野を知り、必要に応じて多様な知識を柔軟に組み合わせて活用することが重要だと思うのです。

## 未来に向けて「仕掛ける」

3 年先や 5 年先の近い未来を動かすことは難しいものです。近い未来については、来るべき社会を予想し、その中で自分の動き方を変える程度のことしかできません。しかし、10 年先や 20 年先の未来は、自ら仕掛けて創り出すことが可能です。過去にも様々な分野で世間のトレンドを生み出した経験がありますが、こうした経験から、未来の流れは世の中に働きかけて創っていけるものであることを、私自身、実感として知っています。

世の中に対して仕掛ける上では、タイミングが非常に重要です。機が熟していないときに新しいものを仕掛けても、世の中に受け入れられないことがあります。新しいものの浸透度を見極めながら、それが世の中全体を巻き込む大きな流れとなるよう、仕掛ける方法を考える必要があるのです。ものづくりの民主化は、10 年先を見据えた仕掛けの一つです。ものづくりだけでなく、今後も様々な分野で新しい流れを仕掛けていきたいと考えています。

新しい流れを仕掛ける際に問うべきは、「未来はどうか」ではありません。未来の大きな流れは、現在の小さな流れの中から創り出すことができます。どうなるかではなく、「未来をどうするか」。私たちは、この問いにこそ答える必要があるのです。



### 6.3 IoT時代に求められる人材とは

有識者に対するインタビューでは、IoT時代に求められる能力として、発想力や創造性のほか、技術からビジネスまでをも含む幅広い分野の知識などが挙げられている。発想力や創造性は、先進的なIoT時代が到来しても、コンピュータによって代替不可能な能力である。また、技術からビジネスに至るまでの幅広い知識を習得しておくことは、何が求められるか分からない不透明な時代において活躍するための重要な条件として位置づけられている。

また、有識者が明示的に言及した能力以外にも、有識者に対するインタビューからは以下のような点を読み取ることができる。

第一に、いずれの有識者も、現在のビジネスの中で、日頃から明確な未来社会像を描いていることが注目される。最先端で活躍するこれらの有識者にとって、未来社会像は他者によって示されるものではなく、むしろ自らが他者に指し示すものである。未来に大きな可能性を与える可能性のあるプレイヤー自身だからこそ、自身の立ち位置から未来がよく見通せるともいえる。いずれにせよ、未来を遠いものとして第三者的に捉えるのではなく、現在の自分自身の立ち位置の延長線上に捉えていることは、第一に注目すべき点である。主体性を持ち、プレイヤーとして自分が関わる未来は、どこか知らないところで他者が実現する未来と比べて、よりリアリティを持って写る。今回の有識者が語る未来社会像は、そのような意味で、机上の空論ではない高度なリアリティを伴うものであった。

第二に、いずれの有識者も、技術に精通しており、その可能性とリスクや限界の双方を冷静に洞察しているという点も注目される。IoTや人工知能といったテーマに対しては、世間の期待も大きく、ときに必要以上に大きな夢や危険性が語られることもある。しかし、実際にその領域を手がけている有識者は、その技術の魅力や大きな可能性を十分に理解すると同時に、足元の現実的な課題も理解している。最先端に身を置く有識者は、技術を現実的に活用することを考え、不必要にその可能性やリスクを強調することはない。彼らにとって、技術の可能性とは、夢や憧れの対象ではなく、ビジネス上の大きなチャンスである。また、技術が持つリスクとは、恐れの対象ではなく、今後現実的に対処すべき課題である。

第三に、技術に関する知見とあわせて、いずれの有識者も「社会」や「人間」についての深い洞察力を有していることも注目される。社会や人間に対して強い関心を持たない技術者もいるが、未来社会において活躍しようと思うのであれば、その活躍の舞台となる社会の姿を理解しておくことは重要であろう。さらに、未来社会を考える上で、人

人間の性質や行動を無視することは難しい。特に、技術の進歩を、人間の機能が代替・強化される歴史として捉えると、未来社会における先端的な技術を考えることは、人間の未来の姿を考えることにもつながる。このような意味で、人間や社会の行方を洞察することは、先端的な技術の動向を考える上では必須であるともいえるだろう。

上に示したとおり、有識者自身の発言からは、「自ら主体的に実現するものとして未来社会を描けること」、「技術の可能性とリスクの双方を現実的に捉えられること」、「社会や人間に対する深い洞察力を備えていること」などの要件が導き出せる。冒頭の発想力や創造性、幅広い知識とあわせて、これらの要件が IoT 時代に活躍する人材に求められるものであるといえよう。

また、IoT 時代の実現には、チップやセンサ、ネットワーク、デバイスやロボット、高度な分析や制御、そして活用するための高品質なシステムやサービス等に関する技術開発や実装に加え、その仕組みをビジネスや生活の中で、有効に活用する人材が不可欠である。こうした IoT 活用人材とも言うべき人材も IoT 時代に活躍する人材となることを忘れてはならない。

## 7. IoT が創り出す新たな時代の到来

従来、デジタル空間の中で進展してきた情報通信技術は、IoT と人工知能の融合により、モノと人を含めた実世界へと拡張される。その結果、人々の行動や生活の利便性が高まり、産業活動の効率化が進むのみならず、その活動の質も向上し、情報通信技術がこれまでにない新たな付加価値を生み出すことが予想される。

本レポートでは、IoT や人工知能に関する最新動向や事例を示すとともに、その将来展望や課題を整理した。最終節では、IoT や人工知能の進展によってもたらされる新たな時代の姿を、IoT の活用や産業の変化等をまとめることにする。

次頁の図 7-1 に示したように、IoT や人工知能の活用によりにおいては、移動・生活・くらし等のあらゆる場面で、個人の利便性が高まるとともに、多様な価値観に応じたモノやサービス提供が実現され、生活の質が向上すると期待される。例えば、自動車は、運転者の負担が軽減されるだけでなく、新たなエンターテイメント空間となる。さらに、生活・くらしにおいては、家事や育児といった日々の活動や睡眠や食生活といった1次活動向けの多様な製品やサービスが提供され、我々の日常生活や行動も大きく変化するであろう。

企業や産業レベルでは、ものづくりの効率性や生産性の飛躍的な向上が進むとともに、ものづくりのサービス化へのシフトやものづくりパラダイムの変化を引き起こすと考えられる。ものづくりのバリューチェーンにおいては、モノのデジタルデータの流通により、ものづくりを従来の設計、生産中心の捉え方から製品の企画や販売や利用・アフターフォロー全体で捉える動きが進むであろう。また、欧米に比較して生産性が低いとされてきた我が国サービス産業や1次産業に関しても、その生産性向上や高度化が進展すると期待される。そして、こうした変化は、現在の産業構造に変革を引き起こすことを予想させる。

勿論、こうした動きを牽引する IoT や人工知能の進展に向けては、本レポートで取り上げた課題を含め、様々な課題もあり、今後、実用化の進展に合わせ、新たな課題が生じるかもしれない。

しかしながら、ここで示された未来の姿は遠い未来の話といえるだろうか。IoT や人工知能の一部が既に実用化されていることを踏まえると、新たな時代の幕は既に上がり始めていると考えるべきだろう。実際に IoT や人工知能の最前線で活躍する人材は、新たな時代をやがて来るべき現実としてリアリティを持って捉え、現在からその実現に向けて果敢な挑戦を続けている。

「新たな活躍の舞台とはどのようなものになるか」、「新たな舞台において我々の生活や暮らしはどのように変わるのか」、「新たな舞台におけるビジネスの主役は誰か」、そして、「新たな舞台の主役となるために取り組むべき課題は何か」——。新たな舞台での

活躍が期待される個人や企業が行うであろうこうした議論の際に、本レポートが少しでも参考となれば幸いです。



図 7-1 IoT、人工知能が創り出す新たな時代の到来

(出所) 各種資料をもとにみずほ情報総研作成<sup>139</sup>

みずほ情報総研 経営・IT コンサルティング部

河野 浩二

koji.kohno@mizuho-ir.co.jp

<sup>139</sup> IoT のイメージに関する図の出所は European Commission, Digital Agenda for Europe The Internet of Things (<http://ec.europa.eu/digital-agenda/en/internet-things>)

©2015 みずほ情報総研株式会社・株式会社みずほ銀行

本資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、取引の勧誘を目的としたものではありません。本資料は、弊社が信頼に足り且つ正確であると判断した情報に基づき作成されておりますが、弊社はその正確性・確実性を保証するものではありません。本資料のご利用に際しては、貴社ご自身の判断にてなされますよう、また必要な場合は、弁護士、会計士、税理士等にご相談のうえお取扱い下さいますようお願い申し上げます。

本資料の一部または全部を、①複写、写真複写、あるいはその他如何なる手段において複製すること、②弊社の書面による許可なくして再配布することを禁じます。